朝宮神社の石造物寄進者名と寛政元年銘地神塔

――――――――――――――――――――― 郷土班（阿波郷土会）―――――――――――――――――――――

滝　よし子[*1]　　佐藤　嘉隆[*2]

１．はじめに

佐那河内村は藩政時代、上佐那河内村と下佐那河内村の２か村であったが、明治21年（1888）町村制の施行により両村は合併して１村となり、現在に至っている。村内にある神社の数は「村の記録に見られるだけでも30社、その他非公認神社台帳所載では90社」あるといわれている（昭和42年刊『佐那河内村史』1174～1175頁）。このうちの代表的な神社４社を訪ね、藩政時代に寄進または境内に建立された石造物の調査を実施した。今回は、他と比べて特徴があると思われる２か所の神社の石造物について報告する。

２．朝宮神社の石造物

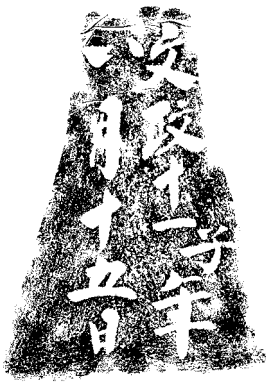
かつての上佐那河内村を代表する朝宮神社（**図１**）は、「佐那河内領主野田氏が崇敬していたといわれる。往古は別の所に鎮座していたが、明応元年（1492）現在地に奉遷せられた」（昭和56年刊『徳島県神社誌』168頁）。神社に造営奉献されている石造物で一番古いのは、拝殿前にある明和元年（1764）の常夜燈で「日参氏子中」とあって、平地（ひらじ）・中遍（なかへん）・井貝（いがい）・中畠（なかはた）・中村の各名（みょう）の人々により寄進されたものである。拝殿下の鳥居・石段・狛犬（こまいぬ）、石段中段両側の常夜燈などは、文政７年（1824）から文政11年（1828）にかけて造営寄進されたもので、中でも石段中段にある１対の常夜燈には、37名の寄進者名が刻まれている。村役人支配外の壱領壱疋（いっぴき）「長尾嘉左衛門」を筆頭に、郷鉄砲五人組の「稲木佐田治」（安政期（1854～1859）以降庄屋）、郷鉄砲の「梯十左衛門」を始め、山間小地区の名称である名と寄進者の名前が刻み込まれているが、徳島城下西大工町の「ふしや利市良」と前原村の「丈太郎」の２人は、佐那河内村の出身者であろう（**図２**）。

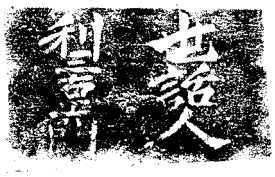
図１　朝宮神社

長尾嘉左衛門は代々嘉左衛門を襲名。宝永～明和（1704～1771）のころまで庄屋役を務め、寛政５年（1793）に壱領壱疋になっている。何代目か不明であるが、嘉左井用水を開鑿（かいさく）した村の功労者である。常夜燈が寄進された文政11年ごろの上佐那河内村の庄屋は岩城政右衛門であるが、この人の名前は見られない。

次に拝殿への63段の石段両側にも、青石にそれぞれ寄進者の名前が刻まれているが、昭和61年２月、手摺設置によって一部剥落した跡が見られる（**図３**）。石段登り口の鳥居は「文政七甲申歳八月十五日、上下佐那河内村氏子中」、また狛犬は「文政十亥年八月十五日、氏子中」によって奉献されている。以上、これらの石造物の寄進日がいずれも「八月十

＊１　板野郡板野町羅漢字川原崎96-1　　＊２　阿南市桑野町廿枝18





文政十一子年
八月十五日

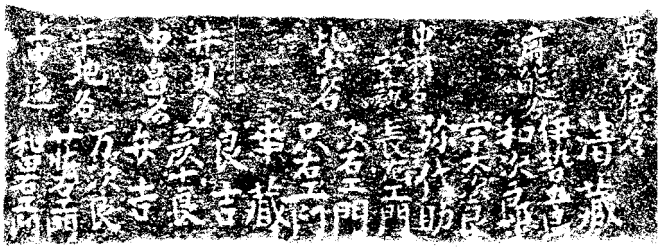
世話人
利三右エ門

上分
中子氏

常夜燈（右側）

常夜燈（左側）の東側面

長尾嘉左エ門
寄稲木　左田治
梯十　左エ門
西大工町ふしや　利市良
前原村　丈太郎
府能尻名　幸　助
熊　藏
幾之烝
奥野名　八太兵エ
同人妻
安藝　快　藏
清兵エ
武十良
附
十兵衛
喜九右エ門



常夜燈（左側）の南側面

粟久保名
清　藏
伊勢五郎
府能名　和次郎
宇太次良
中村名　弥代助
安藝　長左エ門
次右エ門
北山名　只右エ門
幸　藏
良　吉
井貝名　彦十良
中畠名　弁　吉
万次良
平地名　荘右エ門
上中遍　和田右エ門

常夜燈（左側）の北側面

谷内　伊之助
安藝　亥七
雲州太々講中
世話人　初治良
中畠名　久右エ門
北山名　市　藏
府能名　吉太良

図２　石段中段の常夜燈

向かって左（下段より上へ）　向かって右（下段より上へ）

⑤ 下奥野々 氏子中	① 長尾嘉左衛門	⑤ 安藝文平	① 安藝長□□門
⑥ □代□	② 同所 剥落、不明	⑥ 下分 村上 剥落	② 谷名 唯右衛門
⑦ 文政九戌年八□	③ 同所 剥落、不明	⑦ 松本重藏	③ 東府能 □助
	④ 同所 □藏	是より上なし	④ 剥落につき不明

図3　石　段

五日」となっているのは、当時この日は「夏祭り」で、地域共同体にとって、精神的な支えとなった大切な日であったのであろう。

3．嵯峨天一神社の石造物と地神塔

嵯峨天一神社は弘仁3年（812）に勧請されたと伝えられ、永禄11年（1568）の棟札を所蔵する由緒ある神社である。境内にある樹齢360有余年の榧の大木は、村内一の名木であろう。

神社に寄進された石造物は、文政10年（1827）8月15日に奉献された狛犬と文久2年（1862）8月15日銘の常夜燈で、いずれも氏子中により造立寄進されたものである。また、境内に建てられている地神塔は「寛政元己酉十一月十六日」と刻まれ、県内では非常に古いものである。徳島県における地神塔の造立起源については、寛政元年と寛政2年の2つの説がある。中でも「『貞光谷見聞録』[1]に、地神塚は寛政2年10月―早雲伯耆ヨリ建白ニ依リ各郡村庄屋ヲ以祭官トシ春秋社日ニ祭事ヲ行ハシム、当日村民ハ業ヲ休ミ参拝ス―」また『山神勧請被仰付候砌御触書付之写』[2]の中にも「近年地神祭之儀は御触被仰付百性とも祭事仕候（以下略）」とあって、藩が各村々にお触れを出し、祭りを行わせたことがわかる。

4．寛政元年銘の地神塔について

佐那河内村高樋の国道沿いにも寛政元年銘の地神塔がある。「高露、尾堺講中」によって建てられたものであるが、月日はないものの、嵯峨天一神社の境内にある地神塔（11月16日）より早い造立と思われる。その理由として、大宮八幡神社の近くにあり、当時この神社の神官井関充長は、神事故例を研究し、神学の学友に富田八幡宮の早雲伯耆がいたことがあげられる（『佐那河内村史』1221～1222頁）。そして、地神塔の細工人（石工）が、二軒屋町の土佐屋又兵衛であった。富田八幡宮は二軒屋町と隣接地である。余談になるが、土佐屋又兵衛は、享和2年（1802）の『丁内之者共家筋并成立等相調指上帳』[3]の中で、表借家人の石工として記録されている。以上のことから、高樋の地神塔には、大宮八幡神社の神官が関係していたのであろう。それに何よりもこの地神塔は、大江匡弼の『神仙霊章春秋社日醮儀（天明元年序文）』の記載を見習ったもので、五穀守護神の神名のうち、天照大神のみが神で、他の4神は命となっているのも同じである。

5．佐那河内村の地神塔の特徴

上記の嵯峨天一神社と高樋の地神塔を、王子神社境内（徳島市国府町西黒田）と若宮神社横（名西郡石井町高川原字加茂野）の各地神塔と比較してみた。その表と図版は、次のとおりである（**表1・図4**）。

(1)　寛政元年銘は、最初に現れた地神塔と思われる。

(2)　大宮八幡神社の神主と早雲伯耆は知己の間柄であった。

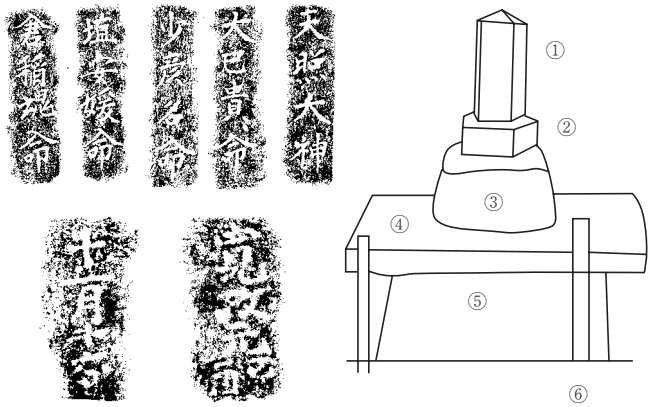
(3)　石工（細工人）が二軒屋町の住人で、早雲伯耆の富田八幡宮とは隣接地である。

(4)　高樋と嵯峨の地神塔を比較すると、

表1　寛政元年銘の地神塔比較表

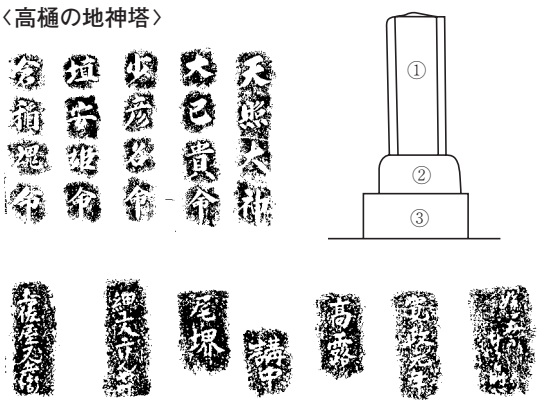
項目＼所在地	嵯峨天一神社	高　樋	西黒田王子神社	加茂野若宮神社
立　地	神社境内	道路沿い	神社境内	神社境内の横
造立年	寛政元己酉	寛政元年	寛政元己酉	寛政元己酉年
造立月日	11月16日	不　明	8月吉良日	な　し
本体部材質	砂　岩	砂　岩	砂　岩	砂　岩
台石の特徴	5角型石	円形台	猫　足	猫　足
主神名の特徴	天照大神	天照大神	天照皇太神	天照皇太神

〈嵯峨の地神塔〉



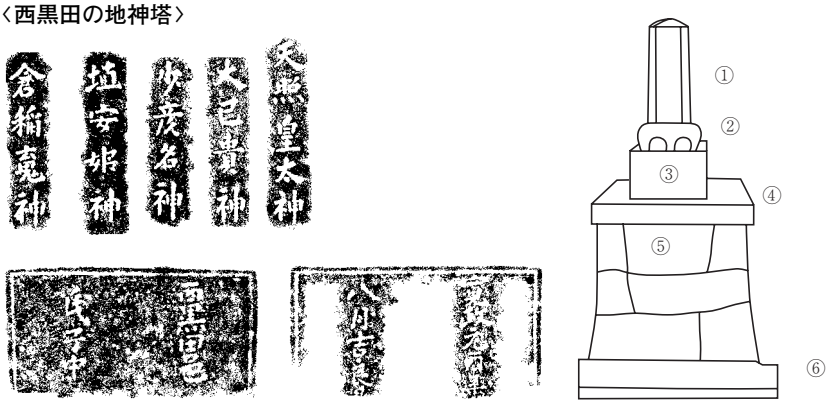
総高159.5㎝
①砂岩製五角、高54.2㎝（内頂部高５㎝）、幅上16.6㎝、幅下16.7㎝。
②砂岩製五角、高15.1㎝、幅上24㎝、幅下23.6㎝。
③片石製四角、高26㎝、幅53.6㎝、奥行52㎝。
④片石製板石状、厚20.7㎝、幅143㎝、奥行113㎝。
⑤片石製石組、高43.5㎝、幅112㎝、奥行100㎝。⑥前２本は木製柱。

〈高樋の地神塔〉



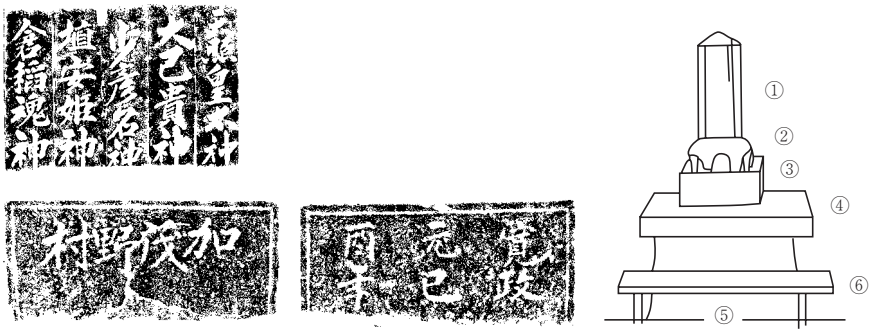
総高112.5㎝（台より上）
①砂岩製五角、高71.5㎝（内頂部高1.5㎝）。
②砂岩製円形台状）高16.3㎝、直径40.7㎝。
③砂岩製四角、高24.7㎝、幅50.8㎝、奥行50.5㎝。

〈西黒田の地神塔〉



総高191.7㎝
①砂岩製五角、高61.5㎝（内頂部高６㎝）、幅上下共16.7㎝。
②砂岩製（五角）、高18.5㎝、幅25㎝。
③砂岩製四角、高24㎝、幅上46.8㎝、幅下46㎝、奥行44.8㎝。
④片石製板石状、厚10.2㎝幅奥行共91㎝。
⑤砂岩製石積、高77.5㎝、幅上86㎝、幅下87.5㎝、奥行88㎝。
⑥片石製の供物台石か？（コンクリート中に埋もれ、厚4.5㎝、幅108㎝、奥行40.4㎝。

〈加茂野の地神塔〉



総高161.1㎝
①砂岩製五角、高61.2㎝（内頂部高5.5㎝）、幅上16.2㎝、幅下16㎝。
②砂岩製（五角）、高17.3㎝、幅25㎝。
③砂岩製四角、高20.8㎝、幅上下共45.6㎝、奥行43.6㎝。
④片石製板石状、厚11.8㎝、幅98.5㎝奥行88㎝。
⑤砂岩製石組、高50㎝、幅上76.5㎝、幅下81㎝、奥行上77㎝、下81㎝。
⑥片石製（供物台石か）、厚４㎝、幅116㎝、奥行35㎝。

図４

①神名は類似している。天照大神のみ神で、他の４神は命となっている。

②台石は円型（高樋）と５角（嵯峨）で異なるが、高樋の方が『社日醮儀』の記載に従っている。

(5)　高樋の地神塔の方が嵯峨（11月16日）のものより建立が早い可能性がある。

(6)　佐那河内の地神塔２基と国府町西黒田と石井町加茂野の地神塔の相違点は、

①台石が西黒田と加茂野は猫足になっている。

②神名が佐那河内は「天照大神」、西黒田と加茂野は「天照皇太神」となっている。

③他の４神は佐那河内の場合は命、西黒田と加茂野は神と表記されている。以上のことから、佐那河内の２基と、西黒田・加茂野の地神塔建立については、神職や石工がそれぞれ相違しているとみられる。

(7)　高樋の地神塔台石の銘文「始而世尓□奉□□時ハ」は、何を意味するのだろうか。

６．おわりに

今回の佐那河内の地神塔調査は２か所に終わったが、いずれも寛政元年銘として貴重なものである。特に高樋の地神塔の銘文が「始而世尓□奉□□時ハ」と読めるならば、県内初の地神塔造立起源となり、今後の大事な調査課題の一つとなる。

朝宮神社の常夜燈寄進者名については、稲木ヒデミ氏所蔵の棟付帳を快く拝見させていただき、また同氏から何かとご教示いただいた。心からお礼申し上げる。

注

1）『貞光谷見聞禄』は明治10年代の写本で、徳島県立図書館蔵。

2）『山神勧請被仰付候砌御触書付之写』は、寛政８年（1796）の古文書。東京大学史料編纂所蔵。

3）『丁内之者共家筋并成立等相調指上帳』は「冨士谷家文書」で、徳島市立徳島城博物館蔵。

文　献

佐那河内村史編集委員会編（1967）：『佐那河内村史』佐那河内村、1174～1175頁、1221～1222頁。

「名東郡上佐那河内村棟付御改帳」(1811)：稲木ヒデミ氏蔵。

徳島県神社庁編（1981）：『徳島県神社誌』同庁、168頁。

神道体系編纂会編（1988）：『神道体系論説編16陰陽道』同会。

高田豊輝（1998）：地神塚と山の神祠、阿波郷土会編『ふるさと阿波』第175号、同会、８～12頁。